

進捗状況の概要 【1ページ以内】

本プログラムは、ナスカ研究等を通じて山形大学が作り上げてきた南米3か国との関係をより全学的に展開し、協定留学を通して**日本とアンデス諸国のブリッジになりうる人材**を育成することを目標としている。
(プログラムの開始と語学教育の立ち上げ)

平成27年9月末のプロジェクト採択後、関係する教職員が南米に出張し、協定6校で推進体制のすみやかな立ち上げを行った。南米3か国において日本語教師を採用し、ボリビアでは平成28年1月から、ペルー・チリでは3月からそれぞれ**日本語授業が開始**され、28年度は3か国で合計100名が受講している。(うち43名が修了し8名は日本語能力試験に合格。)日本側では本事業のための少人数で構成されるスペイン語講座が開設され、長短期の派遣学生を対象に週6時間の授業が行われた。**日本におけるスペイン語、南米における日本語講座の修了が短期留学への参加条件**となっている。

(派遣・受入事業)

平成28年度末までの**留学生数累計は37名で派遣・受入両方で申請時計画を上回る実績をおさめた**。短期留学では、現地の歴史・文化に関する学習と協定校での交流に加えて、企業や福祉・環境関連施設を訪問することで、本プログラムのテーマに沿った研修を実施している。学部別では人文社会科学部(平成29年度に人文学部より改称)、工学部、農学部、地域教育文化学部からそれぞれ学生が参加して**全学的な取組**となっている。長期受入学生に対しては**山形県内でインターンシップ**の機会を提供した。

プログラムが終了する平成31年度末までに**計画を上回る117名の協定留学**を実現できる見通しである。また平成29年度から**事業に付随するスペイン語講座と短期派遣でのフィールドワークが正式科目として単位化**されており、また**短期受入も単位化**される予定で、参加者の更なる拡大と語学力向上が期待される。

(事業体制)

平成28年4月より、山形大学ではこれまで**ナスカ研究を通して培った南米との深い繋がり**、語学教育の重要性を考慮し、プログラムを**人文社会科学部の管轄**とした。新たに設置された推進室は専任者3名を含めた計4名(うち**3名は日英西の3か国語で対応可**)体制で、同室で日常的な協定校との調整、留学生への支援、企画立案を行う一方、**人文社会科学部長を委員長とした運営委員会**がプログラムの指針を決定している。国内の参画校である米沢栄養大学、鶴岡工業高等専門学校にはそれぞれ担当の教職員がおり、これまで4名の学生が両校から短期派遣に参加し、また短期受入時には両校で講義・研修を実施した。

(南米協定校との関係強化)

南米協定校との間では、派遣受入で日常的に連絡をとりあっている他、平成28年度は推進室から2名が11月に2週間ペルーとチリに出張して**協定活動校を拡大**するとともに、日本語講座の現状視察と改善を行った。また1月には協定6校の教職員7名を山形に招へいして**担当者会議を開催**、留学先としての山形大学をアピールするとともに、これまでのプログラムに対するレビューと今後の活動と方向性について協議を行った。

カトリカ大学(ペルー)との間では平成28年4月に**ダブル・ディグリー制度**に関する準備協定書を締結し、同制度構築に向け担当教員を任命し協議中である。

【本事業における中間評価までの交流学生数の計画と実績】

平成27年度				平成28年度			
派遣		受入		派遣		受入	
計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績
8人	15人	5人	1人	8人	8人	8人	13人

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ以内】

（南米における日本語授業）

プログラム開始後、**南米側3拠点で日本語講座**を開講し、交流活動の前提として語学教育のインフラ整備を行った。授業は週4－6時間のコマ数で行われており、予習復習を含めると週10時間以上の学習を要するが、様々な動機を擁した多数の応募者を得ており、授業を修了して来日する留学生は基礎的な日本語会話が可能なレベルに達している。平成28年度は8名が短期受入後の日本語能力試験に合格している。受講生は日本からの短期派遣時、現地での交流学生の主体となっており、**約1週間にわたる日本人学生との合宿活動**を通して南米現地で更なる語学力向上が行われる。また長期日本留学予定者には、来日前の個別指導を行い、日本で効果的な学習ができるよう配慮している。

（協定校との関係強化）

カトリカ大学構内にある**サテライトオフィスが平成28年9月に正式に開所**した。開所式には人文社会科学部長他3名の教職員が出席し、プログラムの更なる発展と両大学の関係強化を確認した。同オフィスにはプログラム専従者として**日本語教師兼事務職員1名が常駐**しており、日本語授業の他、現地での南米3か国協定校との調整、派遣・受入両学生への支援機能を果たしている。授業にはカトリカ大学のみならず他のペルー協定校の学生も出席している。日本の推進室専任教員は平成28年度計**4回南米に出張**しており、協定留学プロセスの明確化、活動参加協定校の拡大、留学生の学部多様化、日本語授業の改善に関し協議を進めた他、3月に行われたカトリカ大学創立100周年記念行事にも出席した。平成29年に入って**協定6校全てがプログラムの活動に参加**したことで、今後ますます多彩な活動が期待できる。

（インターシップ）

平成27年度長期受入のサンマルコス大学（ペルー）考古学専攻学生1名は山形県内市役所で文化財保護業務を行い、また平成28年度長期受入のカトリカ大学工学部学生1名、平成29年度受入の工学部学生2名は県内企業でインターシップの予定が確定しており、これまで受け入れた**長期留学生全員がインターンを経験**している。

（参加者の循環的な拡大と交流の深化）

短期留学では、**日本人学生はスペイン語、南米学生は日本語の講座をそれぞれ修了**することを参加条件とした。加えて母国における**留学生受け入れ時の交流活動、留学後の成果報告会**参加を義務付けており、短期といえども双方**1年以上の取り組み**になっている。成果報告会では同時に語学講座の受講生募集も行っており、参加者が自らの留学経験に対する理解を深めるとともに、後進の学生に対するPR活動にも役立っている。このプロセスを地道に繰り返すことで個人レベルの交流が深まり、現地での**参加学生数も循環的に拡大**した。短期留学経験者の中から**次のステップとして長期留学**する者も出てきており、プログラムとしてもそれを推奨し長期留学生募集を行っている。1年間の**語学基礎講座—短期留学—長期留学を1サイクル**としてその最終段階で**ビジネスレベルの語学力**を身につけ、日本と南米に関連するフィールドで働く「**ブリッジになりうる**」人材を一人でも多く双方で輩出すべく取組みを強化している。長期留学中のカトリカ大学生1名は山形大学への正規留学希望を表明している。

（留学研修による効果）

短期留学では自分の所属する大学・学部の紹介を行う機会を複数回設けて、ゲスト・ホストの双方から英語でプレゼンテーションを行わせた。一般的にプレゼンテーションが不得手とされる日本人だが、南米協定校学生のレベルの高さに刺激を受けて、**日本人学生の内容とスキルが短期間で向上**した。ペルーへの長期派遣学生は当初戸惑った南米文化の一面を「フレキシブル」だと評価するようになり、また短期派遣の理工系学生は貧困・開発問題を報告会で発表していて、留学がそれぞれの**専門分野を超えた幅広い知見を提供する機会**になっていることがうかがえる。

南米では未だ日本＝工業技術のイメージがあり来日する留学生も工学系に偏りがちだが、受入学生からは日本のサービス業のレベルの高さに驚いたとのコメントが多く寄せられた。協定校の社会科学系学部からの問い合わせも増えており、**今後は製造業以外のビジネス領域を志す文科系学生にもアピール**して募集活動を行っていく。また日本側の学生・教職員による受入活動の丁寧さに対し感謝の念が伝えられている。平成28年度に短期来日したタルカ大学（チリ）生は、本プログラムで学生交流の面白さに魅せられ、その後母校の国際関係部のインターンとして働いており、3月の短期派遣時にはチリでの受入活動の主体となってくれた。